

認知症になっても安心して暮らせる社会を

2024 NOVEMBER

No. 532

11

月刊 POLE-POLE (スワヒリ語)

ぼ～れぼ～れ

ゆっくり やさしく おだやかに



「ぼ～れぼ～れ群馬県支部版」

わたぼうし

No.495

認知症の人と家族の会

理念

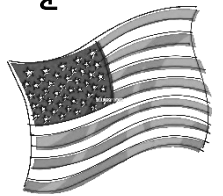
認知症になったとしても、介護する側になったとしても、人としての尊厳が守られ日々の暮らしが安穩に続けられなければならない。認知症の人と家族の会は、ともに励ましあい助け合って、人として実りある人生を送るとともに、認知症になっても安心して暮らせる社会の実現を希求する。

巻頭言

混乱の中からこそ知恵と力を

日本とアメリカで、それぞれの国の行方を左右する大きな選挙が終わりました。アメリカの選挙では初の女性大統領の誕生も期待されましたが、その期待は裏切られました。ハリス副大統領の力不足を指摘する向きもありましたが、それはハリス候補に酷な話だと思えます。民意を救い取れなかった、あるいはハリスさんという候補しか選べなかった民主党という政党が負うべき責任ではないでしょうか。

翻って、日本では自民党が「少数与党」に転落するという結果を招きました。その結果、急成長を遂げた政党の党首が表舞台の主役に躍り出たか、と思う間もなくスキャンダルで転落したことに象徴されるように、今後も様々な混乱が続くことが予感されます。しかし、新しいことは混乱の中からしか生まれません。混乱の中から何か一つでも成果を生み出す知恵と力がこの国に残っているかどうか、しっかりと見定めたいと思います。



目次

・ 巻頭言 混乱の中からこそ知恵と力を	1 頁
・ 報告 2024 年度支部代表者会議 in 和歌山開催	2 頁
・ 生命保険協会より	
「ふれあい愛の募金」のご寄贈	2 頁
・ 第40回全国研究会参加報告	3 頁
「わが家の認知症ケア手帳」⑤④	
渡辺医院院長(当会顧問) 渡辺俊之	4 頁
・ トピックス ドナネマブ費用 308 万円/年	4 頁
・ 編集後記	4 頁

これからの予定

- 12月8日(日) 渋川つどい
10時～12時 渋川市中央公民館
 - 12月15日(日) 県央つどい
10時～12時 県社会福祉総合センター
7階 701会議室
 - 12月21日(土) 太田つどい
10時～12時 太田市蕪川行政センター
- * 第3日曜日に変更しています。ご注意ください！

電話相談

◎群馬県支部(群馬県からの委託事業)

認知症の人と家族のための電話相談

027(289)2740

◎本部フリーダイヤル

0120(294)456

X(旧 Twitter)

やっています





報告

2024 年度全国支部代表者会議開催
10 月 19 日（土）和歌山市にて
多くの提案について熱心に話合う

今年の支部代表者会議は和歌山県支部が担当しての開催。ハイブリッド開催で、参集 104 名、オンラインで 31 名が参加、群馬県支部からは代表の田部井が参加しました。

公式の報告は、資料やネット上で紹介されますので、筆者が注目した点について報告します。

●「家族」と「家族等」との隔たり

認知症ケアにおいて、同じケアに当たる立場にあっても、家族と専門職とは認知症の人との関係性が著しく異なるところに特徴があります。その

の関係性の異なりから想像を絶する愛情深いケアを生むこともありますが、限りなく深いかつとうを生むこともありません。そのように実感したことが、私が今日まで「家族の会」を続けている原動力でもあります。

その点からすると、認知症基本法でも確かに「家族」に触れていることはいるのですが、結局は「家族」と支援者・専門職は「家族等」とひとまとめにされているところに理解の浅さを感じてきました。その理解からは、家族としてかつとうしながらも「介護を続けようと思う」、「介護を続けたいと思う」家族の思いに沿った支援策は生まれません。

その点にきちんと着目した資料が配布されていたことに、「家族の会」の「家族の会」らしさを見ることができ安堵しました。

具体的には、支部代表者会議アピールの中段で、「ともに相互に助け合い暮らしている家族等への支援が、法律制定議論（の時）から後退している」

生命保険協会 群馬県協会
「ふれあい愛の募金」より
30 万円のご寄付をいただく

10 月 30 日、一般社団法人生命保険協会・群馬県協会（会長 阿川和信様）



〈向かって右、小久保徹事務局長〉

の小久保徹事務局長が来訪され、「生命保険協会では、1991 年より社会貢献活動の一つとして CCR 活動（コミュニケーション・リレーションズ）を全国一斉に行っているのですが、群馬県協会でも「地域貢献活動」の一環として、県下生命保険会社の職員に寄付を募り、日頃より社会貢献されている団体に幅広く寄贈させて頂いています。

今年度、貴団体に寄贈させて頂いた「くことになりました」との丁寧なご挨拶・趣旨のご説明の上目録を頂戴いたしました。

熟慮して皆さまのお気持ちに沿うようなかたちで使わせていただきたいと思います。

関係の皆さまに心より感謝します。

との指摘や、「認知症の人や家族等への支援提言」作成の動きの中に見ることができました。生み出される果実に大いに期待しています。

●レカナマップ、ドナマップの治療情報

鳴り物入りで認可された二つの新薬による治療が開始されましたが、それについての情報が思いのほか聞

えてきません。実際に治療が進んでいるのか、進んでいるなら利用者の反応はどうか、進んでいないならその理由はなぜなのか。他の支部からも本部による把握を望む声も出ました。私は各支部の情報持ち寄りによる把握を現実的な方法として提案しました。

（*4 頁に、新着情報を掲載。）

（田部井記）

報告
 第40回 全国研究集会 in 和歌山
 集い、繋がる 〜私たちの未来に向けて



全国研究集会に参加して

群馬県支部副代表 山口怜生

10月20日(日) 和歌山城ホールにおいて開催された「認知症の人と家族への援助をすすめる第40回全国研究集会 in 和歌山」には600名を超える参加者(オンラインを含む)があり参加してきました。

学会などは専門家が集まり専門的な発表を行います。この認知症の人と家族の会の研究集会は、本人、家族、支援者はもちろん、地域の方や、高校生の実践発表もありました。こんな場はなかなかないのではないのでしょうか。

今回は、若い世代と認知症を一つのテーマとして話されました。若いから認知症は関わりない、ではなく自分事として考える為には、皆さんが変わらないと地域は変わらない、と話されていました。

全ての人が自分事として捉えたら



〈丹野智文理事と(向かって左筆者)〉

社会は変わると、丹野さんが話されておられました。自分が認知症になつて、お気に入りのバッグにGPSを入れられたいか、QRコードをつけられたいか。自分事として考えられるような社会になればそうはならないはず、そういう本人視点が大切です。

一方で、当事者は家族に言えないという葛藤もあります。家族が大事だからこそ言えない事があると。だからこそ、認知症の人と家族の会のつどいや地域の活動が大事だと、丹野さんからも力強い言葉をいただきました。

*今回の研究集会は次の様な内容で開催されました。

第40回 全国研究集会 in 和歌山

●基調講演

認知症のイメージを乗り越える

〜つながり拓がる未来に向けて〜

講師・川井元晴医師 (「家族の会」理事、山口県支部代表)

●体験・実践発表

1 認知症になつても身体が不自由になつてもこの街でずーっと一緒に

(兵庫県 丸尾とし子)

2 母の介護を経験して(母への)

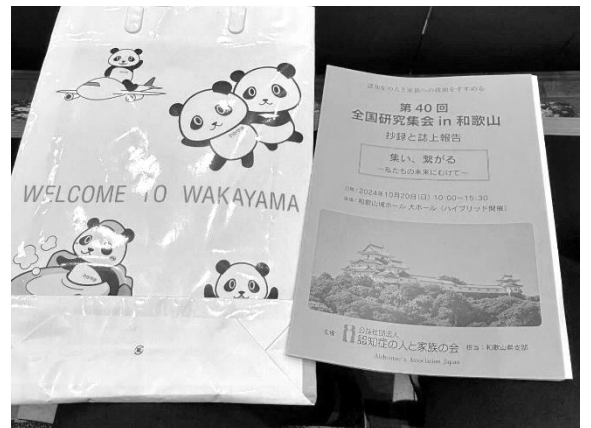
おもてなし(東京都 増田多加子)

3 私達「みかんの会」7年間の活動

経験から(和歌山県 山本芳照)

4 認知症介護者のグリーフケア

(茨城県 牧野 優子)



●シンポジウム テーマ「若者と認知症をつなげる」

○座長 金川めぐみ(和歌山大学経済学部 学部長、教授)

○コメンテーター 丹野智文(若年性認知症当事者、「家族の会」理事)

○シンポジスト

・長山結女(和歌山県立伊都中央高校 普通科定時制課程生徒会長)

・寄山泰志(式会社ともにあゆむ代表取締役、作業療法士)

・長森秀尊(和歌山市認知症キャラバンメイト連絡会会長)

・梅本靖子(「家族の会」和歌山県支部代表)

渡辺俊之の「わが家の認知症ケア手帳」⑤4
今やるべきに集中して

渡辺医院院長（精神科医、当会顧問） 渡辺俊之



在宅介護を5年間続けて夫を亡くした70代のAさんが、外来に来て「四十九日を過ぎたあたりから、急に寂しくなって落ち込んできました」と言いました。私たちは家族と死別した直後は、葬儀、相続の手続き、世話になった人へのあいさつなどに追われます。が、一段落して考える余裕が出てくると、亡くなった人に対して「あれをやってあげればよかった」、「なんであんなことを言ったのだろう」、「もっと〇〇できたのに」といった後悔の気持ちが始まることがあります。同時に「もうあの人はいないんだ」、「これから先、一人でどうやって生きていく」、「自分の将来はどうなるのだろう」と不安が生じてきます。

日々介護に追われる介護者は、過去も未来も考える時間を持っていない人が少なくありません。しかし、目の前にやるべきことがある方が「今」に没入でき、余計なことを考えなく手済む

とも言えます。「忙しさへの逃避」という言葉があります。多忙さは葛藤や不安を考えないようにさせる心の防衛となります。私はしばしば「後悔は過去から、不安は未来からやってきます。今やるべきことに集中しましょう」と患者さんに助言します。介護している人は取りあえず今日やるべきこと、今やるべきことに専念してみてください。う。



1カ月後にやってきたAさんは、「パッチワークに集中していると、あれこれ考えなくて済みます」と笑顔で話しました。とかく「忙しい」が口癖になりがちな私たちですが、忙しさで自分を守っているのかもしれないですね。

トピックス
認知症新薬 年308万円
国内2例目ドナナマブ
11月20日から保険適用



厚生労働省の諮問機関である中央社会保険医療協議会は13日、アルツハイマー型認知症新薬「ドナナマブ（商品名ケサンラ）」の公定価格（薬価）を患者1人（体重50キログラムの場合）当たり年約308万円とすることを了承した。20日から公的医療保険を適用する。米製薬大手イーライリリーが開発。原因物質を除去して症状の進行を抑える薬で、イーザイの「レカネマブ」（年約298万円）に続き国内2例目の適用となる。

軽度認知障害（MCI）と軽度認知症患者が対象。患者の自己負担は、医療費が高額になった場合に一定額に抑える「高額医療費制度」があるため、年齢や年収に応じた支払額となる。現行の仕組みでは、70歳以上で年収156万〜約370万円の人が外来で利用すると年14万4千円の見通し。
治療の選択肢が増える反面、医療保険財政を圧迫する懸念もある。ピーク時には26,000人が利用し、市場規模は年796億円と想定される。
(2024年11月14日付上毛新聞一部抜粋)



〈編集後記〉
特養に入所している妻の母に衰えが目立ち始めました。101歳を超え、さすがにこれが最後の下り坂かと、家族中が覚悟を決めつつあります。そんな私たちについて「点滴の針も入らなくなり、看取りケアに移行します」との連絡が入りました。しかし、その後間もなく再び元氣を取り戻しました。その底力に驚き感動するばかりです。
(田部井)